

現在の周産期医療の質的動向

— とくに早産例の分析を通して —

研究協力者

水 野 正 彦

(東京大学医学部産婦人科)

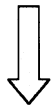
共同研究者

桑 原 慶 紀

(東京大学医学部産婦人科)

周産期医療のシステム化には、現在の周産期医療の内容・質的動向を把握し、将来への展望を持つ必要がある。新生児・未熟児医療に関しては、多くの報告や統計などにより、その動向は比較的理解し易く、一方、産科医療、特に出生前医療については、医療の対象となる大多数は正常な妊婦・胎児であり、その質的变化は把握し難い。しかし、過去10年間の産科医療は、出生前診断の進歩、子宮収縮抑制剤などの新たな治療法の開発、未熟児医療の進歩、胎児の生理・病理に関する研究の発展などを背景に大きく変革していることは間違いない。例えば、従来は自然経過に委ねざるを得なかった早産例は、積極的に子宮収縮を抑制して妊娠期間の延長が計られ、また逆に、胎児診断により胎児状況の悪化が判明し、積極的に早産が遂行されることもある。このように、特に早産例の管理に関しては、近年の産科医療の変革が一番良く反映されていると考えられる。

そこで、産科医療の質的動向を把握することを目的として、東京大学における過去10年間の早産例の分析を企画し、現在研究方法を検討し、分析項目の設定を行っている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



現在の周産期医療の質的動向

- とくに早産例の分析を通して -

周産期医療のシステム化には、現在の周産期医療の内容・質的動向を把握し、将来への展望を持つ必要がある。新生児・未熟児医療に関しては、多くの報告や統計などにより、その動向は比較的理解し易く、一方、産科医療、特に出生前医療については、医療の対象となる大多数は正常な妊婦・胎児であり、その質的变化は把握し難い。しかし、過去 10 年間の産科医療は、出生前診断の進歩、子宮収縮抑制剤などの新たな治療法の開発、未熟児医療の進歩、胎児の生理・病理に関する研究の発展などを背景に大きく変革していることは間違いない。例えば、従来は自然経過に委ねざるを得なかった早産例は、積極的に子宮収縮を抑制して妊娠期間の延長が計られ、また逆に、胎児診断により胎児状況の悪化が判明し、積極的に早産が遂行されることもある。このように、特に早産例の管理に関しては、近年の産科医療の変革が一番良く反映されていると考えられる。

そこで、産科医療の質的動向を把握することを目的として、東京大学における過去 10 年間の早産例の分析を企画し、現在研究方法を検討し、分析項目の設定を行っている。